

炊事当番

母は胃が弱く年中床に伏せている事が多かった。少しでも大食いをしたり、食材が悪いと、ダウンする。

薬は年中飲んでいたし、畑仕事をしたのを見たことが無い。優しく、子供思いの母だが、体が弱いのは玉に瑕だった。

悪くなると医者に掛からず断食する。三・四日断食した後お粥から食べ始める、約一〇日間で全快するが、いつ又寝込むかが心配だった。

私達兄弟は末っ子に長女が産れただけ。頭から男だけである。小さい時男の子三人が亡くなっているから、長男から八男まで男だけ生んだ事になる。

親父も呆れてチヨクチヨク嫌味を言い、母を困らせていた様だ。父と母には呆れたエピソードがある。

母が六・七人続けて男の子を産んだ頃、父は母に難問と懸賞金を提案した。

『女の子を産んだら、百円呉れる』と。その時代の百円は大金であった。

母は四十才ちかい、あの当時は誰でも遅くても数え歳四十二才頃までで、後は生まれない。

八番目に八男が生まれた。母の歳も四十才、後ひと踏ん張りだがあとが無い。懸賞金を貰わず、生産終了かと思っていた時、九番目の末っ子に、四十二才で長女が生まれた。

母は父に「女の子産んだから約束の百円ける」と請求した。

父 「何に使うんだ」と聞き返した。

母 「すまっておく」（使わないで置く）

父 「そうが、今もって来る」

父は台所に行き何やらやっていたが、点け木（つけぎ）に百円と書いて母に渡した。『点け木とは千円札位のごく薄い板で、端

にマツチと同じ硫黄が付いていて、火付け用に使うものであの当時何処の家にもあった』

母 「こんなの銭（ぜに）でないべや」

父 「すまつておぐんだつたら是でいい」

とうとう親父は一銭も母に呉れなかつた笑い話が残っている。

我が家は末っ子が生まれるまで、母は紅一点だった。私達兄弟のうち、私が一番のふざけ坊主で、皆（おだずもっこ）だった。

母は弱い体でよくも、私達を丈夫に育てて呉れたと思いを馳せた。

母が寝込むと台所、食事の用意は、兄弟して交代でやった。昔の食べ物は何処も同じ、ジャガイモに葱の味噌汁、それに大根、白菜の漬物だけだった。

道路沿いに綺麗な用水が流れている、其処で米ときから野菜の洗いや洗濯もする。朝早く起きて一日分の飲料水も汲む。水源池は、五百米上流の水神社から豊富に湧き出ている、通称「長命の水」だが、上流の家では何を洗っているか判らない。

食事当番は私が十二・三才頃からやった。夕方米を研いでいるときや、野菜を洗っているとき、小学校教室を借り、裁縫を習っている年頃の女性を通る。見られると、しよすい（恥ずかしい）。

遠くから見かけると、洗い物をホッポリだし、木の陰に逃げる。見えなくなつてから戻り、洗い物や米を研ぐ。

風呂水も天秤棒で十回位運ぶ。小さい体でよくも、と思ひ出される。長女の末っ子は就学前で、弟達もまだ無理だ。いちばん多く炊事当番したのは私だったろう。

両親も、兄達ももうこの世には居ない、思ひ出を綴る時、人一倍涙脆いわたしは、溢れる涙を止める事が出来ない。